濁酒

日光道中幸手栗橋の邊にては、酒店の看板に片白有と記しぬ、安き酒の名目なりとぞ、則諸白の字義に對したるやおかし

右は延享の頃、私曾祖父日光へ參詣致候節の紀行に見えたり、只今片白と申名目有無不相知、

〔江戸總鹿子新增大全七〕江府名物幷近國近在土產　淺草並木町　山屋半三郎

隅田川諸白

〔伊呂波字類抄仁飲食〕醪ニコリサケ　濁酒　酎　已上同ニコリサケ

〔下學集下飲食〕濁醪　松醪　茆柴　濁醪也、一醉而卽醒、如燒茆柴火便滅、故云茆柴酒也、

〔書言字考節用集六服食〕濁醪　濁酒　黃醅、單醪、並同、　醨　活法、酒濁曰醨　黃醅　濁酒一名、活法、酒未榨也、

〔梅園日記一〕茅柴

葛原詩話前編云、俗ニ村店ノ薄酒ヲ、鬼コロシト云、卽村店壓茅柴ト云是ナリ、又茅柴酒トモ云ベシ、韓子蒼詩アリ、飲慣茅柴諳苦硬、不知如蜜有香醪ト、堅瓠集ニ、茅柴ノ胸ニコダワリテ、下リ難キヲ、惡酒ニ喩フトナリ、又後編ニ云、茅柴、前編ニ解ス、然ルニ事物紺珠ニ、茅柴、言如茅柴焰易過、薄酒也、此解甚佳ナリ、東坡詩、幾思壓茅柴、禁網日夜急、按ずるに、事物紺珠は、明の萬曆十三年乙酉、黃一正が撰なり、これより百四十餘年さき、皇朝文安甲子の序ある下學集に、茆柴濁醪也、一醉而卽醒如燒茆柴火便滅とあれば、古く唐土の說あるべくおもひしに、果して宋人の錦綉萬花谷前集に、韓子蒼詩云々、謂苦硬之酒、如茅柴火易過とあり、さて葛原、茅柴と壓茅柴を、同物とせしは誤なり、施注蘇詩云、茅柴、乃村落所釀醨酒也、又黃州人造私酒、俗謂之壓茅柴と見えて、壓茅柴は隱し造り也、

〔梅園日記四〕濁醪

誹諧新式に、とぶろくとあるを、誹諧通俗志には、醂醾漉と見えたれども誤なり、是より前、大和本草醂醾の下に、花